

平林たい子「敷設列車」論

—生政治の視座を通して—

A Study on Taiko Hirabayashi's "Laying Train": From the perspective of Biopolitics

楊 佳嘉

This paper is a rereading of Taiko Hirabayashi's novel "Laying Train" from the perspective of biopolitics. There is a vertical hierarchy of Japanese as "imperial vassals" and Chinese laborers who are treated like animals in the Japanese colony "Manchuria" in this fiction. However, the relationship between the Chinese and the Japanese is not absolute binary opposition, but it fluctuates between the binary opposition and the similarity as the story progresses. Though there are significant ethnic and class differences between the two, the desire to save lives in the event of the natural disaster such as floods is shared to some extent. Because of plague, the lowest-ranking Chinese laborers were abandoned and treated as "homo sacer." The Japanese who work at the laying site are higher than them, but if a flood occurs, they may also be abandoned by the empire, making them become potential "homo sacer." The distinction between Japanese and Chinese as "homo sacer" varies according to the intersection of ethnicity and class. In this novel, by depicting such a complex relationship between the Chinese and the Japanese, Taiko revealed the principle of biopolitics in the Japanese colony "Manchuria", that anybody might structurally become a "homo sacer" (more or less). Clearly, "laying train" is a work that reveals the structure of biopolitics in the modern Japanese colony "Manchuria". Not only that, but Taiko pointed out the possibilities of a life community in which Chinese laborers are solidarity based on the "precarious life". Therefore, we found Taiko's "flexible internationalism" concept, which re-examines the greater universal problem of life by paying attention to the position of the lowest level laborers. It is Taiko's attempt to transcend the ideology of contemporary proletarian literature where class struggle is an absolute value.

【キーワード】平林たい子、「敷設列車」、生政治、「満洲」、苦力

Taiko Hirabayashi, "Laying Train", biopolitics, "Manchuria", coolie

はじめに

「敷設列車」は、平林たい子が1929年12月に『文藝戦線』に発表した小説である。この作品は「満洲」中北地域にある洮昂鉄道¹の敷設現場を舞台として、そこで酷使された中国人労働者の苛酷な生存と労働の状況、そして彼らの抵抗を描いた物語である。作品の前半は、鼠の仕業によって発生した「盗難」事件をめぐる日本人と中国人の揉め事が描かれる。「逃亡犯人」を見つけようとした警務部員が中国人に発砲する事件にまで発展し、それを契機として、中国人労働者たちはストライキを計画する。さらに、敷設

1 洮昂鉄道：洮南（現在は中国吉林省白山市にある）より昂々溪（現在は中国黒龍江省チチハル市に位置する）に至る鉄道であるが、終始端駅は四洮鉄道の洮南駅及び中東鉄道の昂々溪駅とは各々数キロメートルの距離にある。この鉄道は1924年9月3日に奉天省当局と南満鉄道の間に締結した『洮昂鉄道建設請負契約』により1925年6月末に工事に着手し、1926年7月はじめに工事を終えたものである。（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課『パンフレット第六十一号 満蒙に於ける鉄道の概要』、南満洲鉄道株式会社、1929.6、p.14。）

現場の衛生管理の不備によって中国人の間にウイルス性病の伝染が広がり、死者も出る。しかも、その死体は燃やしたただけで放置され、鼠の餌食になる。病人の治療と労働時間の制限を要求するべく、中国人労働者の一部がストライキを実行に移すが失敗に終わる。最後に、洪水が来るという情報が入る。それを警戒した中国人労働者は、水害を回避し病人を入院させるために引き返すことを要求するが、日本人技師にそれを受け容れる意志がないと見て取り、自分達だけで列車を引き返す計画をたてる。決行の日、彼等は団結し、日本人監督たちを捕縛するとともに敷設工事の起点の方向へ機関車を出発させていく。作品内の時間は1924年6月と設定されており、実際の洮昂鉄道の建設より一年早い²。事実を背景としているがフィクションであり、洮昂線でのストライキは全てたい子の創作である。

同時代評においては、この作品についての評価が分かれている。高評価なものとしては、例えば島影盟がこの作品における「ガッシリ」した構造や「搾取する者と搾取されるものとの対立」を端的に表現したことを高く評価し³、広津和郎はこの作品を「プロレタリア芸術の成長の上に、十分な功績をもっている」と位置づけている⁴。また、板垣直子は「敷設列車」を平林たい子の代表作として取り上げ、「氏は単に女流作家の中の第一人者である許りでなく、男子の作家達と並べても、群を抜いている」と賞賛する⁵。一方、十時三郎はこの作品における文章の難しさに閉口するといひ、それを女性作家の創作の傾向としながら、「イデオロギッシュに何らの発展をも示さなかった」という文戦派の思想的限界として論じた⁶。また、山村梁一はこの作品における芸術的な描き方に「賛成」せず、たい子の「施療室にて」(1927年9月)のような「女性としては粗削り過ぎる位の表現と内容的なもの」への期待を見せている⁷。ほかに、雅川滉はこの作品の表現を新しい芸術形態として高く評価する一方、「藝術的粉飾」はプロレタリアートの「示威運動に対して無力である」と感じており、作品における心理的描写の足りなさを指摘した⁸。まとめると、この作品は1930年前後の文壇で注目され、作品の完成度と芸術性が高く評価されたにもかかわらず、プロレタリア文学としては芸術的な描き方の有効性と効果が問われ、評価が分かれたといえる⁹。

先行研究は次のようにまとめられる。戦後まもなくこの作品は再注目されており、作品の描き方の特徴が主観と客観の統一にあるとされ¹⁰、同時代の「プロレタリア文学の到達した高い一つの水準」¹¹として、あらためて評価された。1980年代には助川徳是が「敷設列車」を含めたたい子の初期作品の表現の特徴を「広大な眺望」の視点とみるとともに、そこにはたい子の「原初的な自然性とか、地母神的な感性」という精神の型があり、政治の優位性を重視するナップ派とは一線を画していると評価している¹²。2000年以降は、この作品における反帝国主義と反植民地主義の性格が注目されてきた。田中益三は「敷設列車」を反帝小説というプロレタリア文学の公式による産物としつつ、異民族との連帯の可能

2. それについて、岡野幸江はたい子の単純なミスの可能性を指摘している（岡野幸江『平林たい子 — 交錯する性・階級・民族 —』、葎柿堂、2016、p.144、注11）。

3 島影盟「プロレ派の作品下 十二月創作評(3)」「やまと新聞」朝刊、1929.12.12、第1面。

4 広津和郎「文芸時評」、『改造』12-3、1930.3、p.174。

5 板垣直子「新興女流作家」、『女人芸術』3-9、1930.9、p.98。

6 十時三郎「文芸時評 敷設列車(1)」、『萬朝報』、1929.12.3、第3面。

7 山村梁一「十二月の文戦作家」、『文芸戦線』7-1、1930.1、pp.127-128。

8 雅川滉「独断的批評六箇條(十二月創作月評)」、『三田文学』5-1、1930.1、pp.80-81。

9 その背景として、1929年の文壇を賑わした文芸の政治的価値、芸術的な価値をめぐる議論において、政治的価値一元論が最終的に勝利を占めたことがある。また、作家のジェンダーや所属する芸術団体の関係によって評価にバイアスがかかっていることも考えられるだろう。

10 小原元『批評の情熱』、雄山閣、1948、p.73。

11 壺井繁治「平林たい子論」、『新日本文学』7-6、1952.6、p.128。

12 助川徳是「鳥瞰された時間——平林たい子の初期四作について——」、『平林たい子研究』（宮坂栄一編）、信州白樺、1985、p.16。

性を夢想させ植民地の構造それ自体を指弾する作品として位置づけた¹³。岡野幸江は「満洲」の最下層労働者に焦点を当てて、その民族的、階級的主体の回復を主題化した点に注目し、1920年代の植民地最前線を切り開いていった日本の侵略行為を浮かび上がらせた作品であると述べている¹⁴。さらに、李雁南は語り手の位置に注目し、主体性のある中国人苦力の表象にたい子の民族を超え階級に基づいたインターナショナリズムの姿勢を見出している¹⁵。郭璇はたい子がこの作品で巨視的な視点で苦力を描き、彼らに〈主体性〉を与えているとし、日本人監督たちも苦力たちも等しく帝国主義の犠牲者となるという実相を暴き出したと指摘する¹⁶。

以上にまとめたように、近年の先行研究では作品の反帝国主義と反植民地主義の性格が注目されており、作品における中国人苦力の主体性の問題も指摘されるようになってきている。ただしこれらの論では、中国人と日本人の関係性を、搾取される者と搾取する者として対立的に理解するか、あるいは帝国主義とその犠牲者という枠組みを用いて双方を等しく犠牲者として同一化しており、いずれにしても二項対立的な理解となっている。それに対して論者は、「敷設列車」を含めた平林たい子の「満洲」関係の物語の特徴として、植民地における中国人と日本人のそれぞれの内部の差異と分断が丹念に描かれていることに注目している¹⁷。本論では、「敷設列車」にも、宗主国の人／被植民者のような二項対立的構図や、民族的な差異を無化して階級のみを前景化する単純なインターナショナリズムの構図ではなく、日本人と中国人の差異が浮き彫りにされると同時にそれぞれの内にも決して同一化できないものが存在するという、異なる力学が複数的に交差する抑圧のメカニズムが描出されていることを明らかにしたい。

具体的には、作品における複層的な対立の構図(日本人と中国人の差異、日本人の内部の差異と分断)を明らかにした上で、生政治の視座からそこにおける中国人の「ホモ・サケル」(homo sacer)¹⁸としての生とそこからの主体性の回復を、彼らの抵抗のプロセスを通して分析する。作品における生政治の構造を明確にすることで、平林たい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉の思想を明らかにしたい。同時代のプロレタリア文学において唱えられた国境を超えたプロレタリア階級の団結という大枠の理念ではなく、日本の植民地「満洲」¹⁹における各階層の日本人と中国人の間における様々な差異を認めた上で示される、最底辺に置かれた中国人労働者の生命共同体への共感があることを明らかにし、それを〈柔軟なインターナショナリズム〉として読み解く。

13 田中益三『長く黄色い道——満洲・女性・戦後』、せらび書房、2006、pp.32-42。

14 同注2、岡野前掲書、pp.128-145。(初出：岡野幸江「平林たい子と満洲——「敷設列車」から見る1920年代」、『世界文学』120、2014.12、pp.20-27。)

15 李雁南『在文本与現実之間——近現代日本作家笔下的中国』、北京大学出版社、2013、pp.91-104。(初出：李雁南「超国界与超民族的階級認同——昭和初年日本無産階級文学中的中国劳工形象」、『広東教育学院学報』26-6、2006.12、pp.38-43。)また、李は『錯綜する人と空間——プロレタリア作家の中国像』(有信堂高文社、2021)においても「敷設列車」に言及している。

16 郭璇「平林たい子の「敷設列車」における「苦力」表象——プロレタリア文学と「満洲」の労働者へのまなざし——」、『比較文化研究』141、2020.10、pp.93-104。

17 その特徴は「敷設列車」のみならず、「投げすてよ！」や「施療室にて」などの作品においても見られる。詳細は拙稿「平林たい子と彼女の「満洲」体験物語——作品における空間の意味と機能をめぐって——」(『北東アジア研究』32、2021.03、pp.1-18)を参照されたい。

18 この「ホモ・サケル」(Homo Sacer)とは、ジョルジョ・アガンベン(Giorgio Agamben)によって提出された概念である。この概念についての説明は後述する。

19 作品が発表された1929年当時の状況からして、満鉄による鉄道建設によって日本の帝国主義が拡大している満鉄付属地域であろう。

1. 複層的な抑圧のメカニズムの展開 —— 鼠の仕業を通して

はじめに、作品における民族と階級の差異によって構築された複層的な対立の構図を抽出しておく。この作品では、様々な職種の中国人労働者と日本人の職員が登場する。中国人労働者は、ボルト締めや犬釘打ちの仕事をする工夫(28人)と、単純な肉体労働に従事する苦力(400人あまり)の二種類に分けられている。日本人の中には、中国人労働者を監督する現場監督や、中国人労働者の生活空間を管理する警務部員のほかに、事務関係者、技手、技師、委託医などがある。それぞれの職種の間での差異とヒエラルキーは、次のような箇所に巧妙に示されている。引用したのは、日本人が泊まっている宿営車で、委託医の山田と技手の伊東の間でなされた会話である。

「君、支那人の盗癖って奴にゃ参ったねえ。さすがの僕もとうとう洗面所の台に置いたベルベット石鹸を昨夜中にとられてしまったよ」／「僕も昨日あそこで歯ブラシをとられた。しかし、ありゃあ鼠の仕業だよ。」／伊東はやや不機嫌に答えた。彼には山田の派手な靴下が堪らなく軟弱に見えた。大きく言えば日本という祖国の食糧問題、人口問題の解決の戦士として、軍人に勝るとも劣らない使命をもってこの蒙古の野に出張している帝国臣民が、ハルビンのダンスホールに通う英国人の利権屋の様なあの靴下は何だ！彼は故郷の下関の連隊で工兵伍長だった。(p.285)

山田は歯ブラシが無くなったのを中国人に盗まれたのだと勝手に判断し、技手の伊東に不平をこぼした。しかし、伊東は「やや不機嫌」にそれは「鼠の仕業だ」と返事をした。その不機嫌な態度は、彼と山田の間の差異と分裂を示している。「工兵伍長」の出身で、軍人という素性を持つ伊東は技術力を生かして「満洲」の鉄道建設の現場で仕事をしている人間である。彼からすれば、「英国人の利権屋の様なあの靴下」を履いている山田は「帝国臣民」として「満洲」で働く日本人に相応しくないことは明らかであろう。ここで、伊東と山田の間の職種による差異とヒエラルキーが描かれることで、日本人内部の二項対立の関係が現れている。

また、「盗難」の話は食堂車においても出てくる。次に着目したいのは、この場面において日本人は何の根拠もなく盗難を中国人の癖と見なしていることである。

食堂車でも盗難の話が出た。油がにじみ出ている吊ランプの壺の下で、彼等は帽子を被った儘飯をかつ込んだ。そして鼠の仕業を人間の仕業の様に言う事に興味を覚えた。(中略)支那人は子供が大きくなると先ず何よりも先に物を盗む方法を教えると言う話が出た。

「丁、お前も教わったか」

入れ歯をガクガク動かしていた連絡係の畑が給仕のために立っている×××²⁰に言った。

「不如(まさか)！」

「丁は苦笑した。皆笑った。」(p.285)

食堂車で中国人は「子供が大きくなると先ず何よりも先に物を盗む方法を教える」という話題が出ており、連絡係の畑が給仕の丁に「お前も教わったか」と聞き、丁が中国語で「不如」(まさか)と返事し、苦笑する場面である。給仕が付いている食堂車という場所であるから、そこで食事をするのは日本人だろう。丁の苦笑に対して食堂車の皆も笑った。その笑い声には「鼠の仕業を人間の仕業の様に言う事に興

20 伏せ字。「支那人」。

味を覚えた」という面もあるかもしれないが、食堂車の日本人の中国人労働者に対する無意識的な見下す視線が感じられる。

さらに、現場には、盗難を鼠の仕業であると知りながらも、わざと中国人のせいにした日本人もいる。

「兎に角、三号の宿営車の張ってやつに注意して下さい。あいつの顔は、ありゃ普通の支那人の顔じゃないですよ。盗癖のある顔だ。たしかに」

鮫島は敷設機の方へ歩き出し乍ら庶務の笹島に囁いた。彼は平生自分に敬意を表さない張に対してある憎しみと怖れをもっていたので、盗難を鼠のせいにしなくて、そんな風に言いたかった。

(pp.285-286)

現場監督の鮫島は、「自分に敬意を表さない」工夫の張の顔を「盗癖のある顔だ」と庶務の日本人に伝え、張の行動に対して注意を喚起する。食堂車の日本人の中国人労働者に対する見下す視線が無意識的なものであるといえるならば、現場で中国人に対して意地の悪いことを言う鮫島は、日本人としての優越感を自覚して中国人を軽蔑し、さらには従順ではない中国人に悪意を持っているといえよう。

壺井繁治は、「鼠の仕業を中国人労働者たちの盗癖にすり替え」て、彼等を鼠以下に取り扱う日本人の描写を通じて「日本の植民地政策の本質が典型的に描きだされている」と指摘した²¹。ただし、微分化すればこの作品におけるヒエラルキーの構図はより複雑になる。この作品における民族と階級の力学は重層的で、大きくいえば、「帝国の臣民」としての日本人とそうではない中国人という垂直的なヒエラルキーで維持されているが、日本人内部においても職種によって不均衡な力関係が存在しており、それは伊東の山田に対する不機嫌な態度を通してほのめかされている。中国人労働者は民族と階級という二重の抑圧のメカニズムによって、最下層におかれている。したがって、異なる力学によって複層的に課されたヒエラルキーが「敷設列車」において展開されているといえよう。

2. 曖昧化された人間と動物の境界 —— 「ホモ・サケル」となる存在としての中国人労働者

では、最下層に置かれた中国人はどのように生存しているのか。本節では、彼らの生活と労働環境の描き方に注目し、彼らの生の有様を確認しながら、帝国における彼らの位置づけを明らかにしたい。まず、彼らの生活環境を見てみる。

土匪襲来の噂を、十日に一度ずつ連絡して来る後の建築列車が運んで来た。四五日前から装甲車の四角な鋼鉄の蓋が吊上がってあいた。夜になると二つの窓からライオンの目の様な探照灯が光り出した。それは土匪への防備の意味も三分は含まれていたが、七分はいよいよ苦しい作業にさしかかって来た苦力達の逃亡を防ぐためである。(p.282)

レール敷設の現場では、苦力達の逃亡を防ぐための「ライオンの目の様な探照灯」が用意され、夜になると光り出したと描写されている。「ライオンの目の様な」という比喩は、権力者が猛獣であるライオンのように、苦力達を監視することを意味しているだろう。また、警務部員は彼らに「飛出されないため」に用心して、「宿営車の扉に外から錠を下げて」いる(289頁)。彼らの生活環境において、警務部員は宿営車の扉の開閉や錠の上げ下げなどを通して絶対的な権力を持っている。つまり、労働時間であるか否

21 同注 11、壺井前掲論、p.127。

かを問わず、中国人労働者達は監視されている状態で生活し、この先の十ヶ月も「監獄の壁」(293頁)の中に置かれるような状態だと予見できるのである。

しかも、監視された状態であるのみならず、作品においては中国人労働者と動物との境界線が曖昧化されたり中国人が〈動物〉²²化されたりする表現が多く現れている。たとえば、鼠が作品の中で多くの場面に出てくるが、中国人労働者の労働と生活の空間に頻繁に乱入することを描いた場面に注目したい。

一人が材料車の上へハンマーを探しに行っている間に鼠は彼等の注意と注意との間を稲妻の様に隙をうかがって逃げた。／彼らは理由なく、鼠にも劣った人間の様に自分のことを考えた。(中略)／すると、毒瓦斯の様な温気が広々とした蒙古の大気の中へ快く散って行く。彼等はそれから水浴や煽風機の夢を見ながら朝まで一団りの豚肉みたいに崩れて眠るのである——鼠はその扉口から侵入した。(pp.284-285)

鼠はすばやく中国人労働者の労働空間から逃げたり彼らの泊まっている宿営車の扉から侵入したりし、公私にわたり監視される彼らよりも行動しやすい。それゆえ彼らは、自らを鼠にも劣る存在だと感じている。また、彼らが仕事をする時、「蠅の様に散って自分の部署」ととまると描かれ(287頁)、「炭酸ガスがいつも充満していた」(284頁)宿営車で休憩している時は、「一団りの豚肉みたいに崩れて眠る」と描かれている。こうした比喩を重ねることで、中国人労働者が人間よりも、動物に近い状態に置かれていることが示されているのではないかと。さらに、警務部員が犯人を探す時には、囚人に対して「監獄語」である「雑品」という言葉を使い、中国人を「鼠の様に」と乱暴に取り扱っている²³(290頁)。つまり、中国人労働者と動物の境界線は曖昧となり、彼らが動物のように働き、生活していること、また動物のように扱われていることが示されている。端的に言えば、中国人労働者は日本の植民地主義において〈動物〉化された他者なのである。

また、中国人労働者は〈動物〉化されるだけでなく、殺されてもよい、病気で死んでも構わないような存在として描かれている。具体的な場面としては、彼らが労働の現場において「現場監督に乱打され」(287頁)ることや、宿営車の前で警務部員に勝手に銃で撃たれたことなどが挙げられる。次の引用は「逃亡犯人」を探す際に、警務部員がある工夫に発砲した場面である。

たてかけてある銃を、ある気持をもってじいっと見つめていた若い工夫があった。どなっている途中でフッと警務部員はそれに気がついた。彼にはそれがあまりに重大な発見だったので反射的にスッと視線をそらした。／「こいつだな。逃亡犯人は」／彼は何故ともなくそう思った。外らした視線に通じる神経の底の方で、銃身に蛇の様に巻きついている、その男の白熱光の様な強い視線をはっきり感じる事が出来た。今にもその視線がクレーンの様に銃を巻き上げてしまいそうだ。／彼はある頂点にいる瞬間を感じた。／次の瞬間彼は咄嗟に×²⁴をとり上げた。そして××²⁵をその工夫のいる方へ向けた。／(一行削除)／それは過失であったか故意であったか彼自身にもわ

22 ここでの〈動物〉の意味は、生物学における動物の意味ではなく、人間でありながらも動物同然あるいは動物以下のような存在とみなすことである。

23 この意味で、この作品における鼠という記号は監獄的な空間の境界線を自在に侵犯する可能性をもった表象であると同時に〈動物〉化された他者表象でもあるという両義性を持っている。

24 伏せ字。「銃」。

25 伏せ字。「銃口」。

からない。彼はただ埃の渦いている地面に動いている肉体を見た。それが幻影の様でもあった。(中略)／×××²⁶た男は×××²⁷ってうめいていた。(pp.290-291)

ここには、銃を恐れず「白熱光の様な強い視線」で銃を「じいっと見つめていた」若い工夫が描かれている。そのせいで、警務部員はこの若い工夫は「逃亡犯人」だと「何故ともなくそう思」い、彼に発砲した。「それは過失であったか故意であったか彼自身にもわからない」というところからは警務部員がはっきりした殺人の意志を持っていなかったと読める可能性があり、帝国の権力の射程が満鉄という支配装置を通して警務部員の内部まで届きうることがわかる²⁸。本論で注目したいのは、警務部員に殺人の意志があるかどうかということではなく、警務部員と中国人労働者の間の権力関係である。つまり、中国人労働者にとって警務部員は絶対的な権力を持っているのである。確実な根拠もなく恣意的に「逃亡犯人」を決めて、銃で撃つという行為の描き方を通して、中国人労働者は殺されてもよい存在として描かれている。

さらに、会社の衛生管理の不備により、多くの中国人労働者がウイルス氏病に感染したことも無視するわけにはいかない。

遂に二人の死人が出た朝病人は百九十人に達した。出発の敷設車の上には工夫の姿がまばらになった。しかし、列車は髯の様に散る黒煙を吐いて威丈高に出発した。それは充ちあふれる戦闘意識をもった戦闘艦の姿に見えた。／風の方向が変わった。一町程離れた地点で石油を掛けて二個の死体をやいていた煙がす早く地面を這った。(中略)／焼けのこった死体は、地面の起伏の一つになって突起していたが、一夜のうちに鼠のためにその起伏はなくなってしまった。(p.295)

ここでは、「黒煙を吐いて」戦闘意識を持っているように出発する敷設列車と、焼け残った死体が対照的に描かれている。その描き方には、「満洲」における日本の鉄道帝国主義の表裏が示されている。表はひたすら前進する戦闘艦のような敷設列車であるが、その裏には死んだ名も無きの中国人の労働者がいる。感染した人々は病院へ送られることなくほぼ放置されたような状態であり、次第に死んでいくのである。死体は現場で焼かれ、最後には土と一体になる。この前進する敷設列車は、岡野が指摘しているように、「最前線としての「満蒙」という地」を切り開く、日本の「侵略の尖兵のメタファーとして」機能している²⁹。日本人が見るのは、鉄道の建設に伴う帝国の光栄のみであり、その以外のものではない。死んだ中国人労働者は人々に記憶されず、使い捨て可能な生として「満蒙」の大地の一粒の土となるのみである。

ジョルジョ・アガンベンは近代の政治的文化における生政治の構造を分析し、「ホモ・サケル」という概念を提示した。「ホモ・サケル」というのは、「犠牲化不可能」であると同時に殺害可能である生であり、「聖なる生」(sacred life)あるいは「剥き出しの生」(bare life)と説明されている。このような生は、政治的なビオス(bios)³⁰でも自然的なゾーエー(zōē)³¹でもなく、ゾーエーとビオスが包含しあい排除しあう

26 伏せ字。「射たれ」。

27 伏せ字。「はらば」。

28 前掲同注2、岡野論、p.142。また、郭は警務部員も「『意識』を操縦され、権力側に翻弄される哀れな存在として描かれている」と主張する(前掲郭論、p.101)。

29 同注2、岡野前掲書、p.143。

30 ビオス(bios):それぞれの個体や集団に特有の生きる形式、生き方を指す。

31 ゾーエー(zōē):ビオスに対して、生きていくという単なる事実を表現している言葉である。

ことでお互いを構成する不分明な地帯におかれ、また主権圏域(sov^{er}ei^gn sphere)³²に「捉えられる」のである。「ホモ・サケル」の生の形式は、ある共同体に排除を通じて包含されているのであり、彼らにとっては、彼ら以外のすべての人間が主権者として振る舞うような者である。彼らの生は共同体を維持するために必要だが、法的保護の外に投げ出されている。このような主権と「剥き出しの生」との〈排除を通じての包含〉の関係は、近代における政治の構造の特徴であり、社会の全ての人は構造的に潜在的な「ホモ・サケル」であるとアガンベンが主張している³³。前述したように、「敷設列車」における中国人労働者は日本帝国の鉄道建設に必要な存在であるが、動物と人間という自然と文化のあいだの不分明な地帯に置かれており、彼らの生は法的保護の外に投げ出され「剥き出しの生」へと格下げされているといえよう。

したがって、生政治の視座からすると、異なる力学が複層的に課した抑圧のメカニズムが機能している日本の植民地の枠組みの中では、中国人労働者は日本の植民地主義における〈動物化〉された他者として存在し、日本帝国という共同体から排除され、主権的圏域に捉えられた否定的な対象となる。日本人内部では下層である現場監督や警務部員らが彼らの生殺与奪権を持っているように、彼らにとっては、すべての日本人が主権者である。しかも、彼らは死んでも帝国のために「犠牲化」される可能性がない。つまり、「ホモ・サケル」となる存在と言わざるを得ないのである。

3. 使い捨て可能な生から「不安定な生」(precarious life)³⁴の連帯へ——命を守るための生命共同体の形成

ただし、平林たい子は中国人労働者を「ホモ・サケル」として描くことを通して日本帝国の鉄道植民地主義における生政治の構造の本質を告発するにとどまらず、中国人労働者が機関車を奪取するという虚構を設定して、「ホモ・サケル」である中国人に生き延びる希望を与え、より普遍的な生の問題を問い直している。本節では、中国人労働者と日本人の動的な関係を分析し、中国人の抵抗の難しさに注目しつつ、彼らがどのように抵抗したかを問うていく。なぜ最初のストライキは失敗したのかと、困難にもかかわらず最後には機関車を奪取するまでに至ったプロセスを分析することによって、命を守るといことは彼らが最後に団結して抵抗する際の最も重要な動機であったことを指摘したい。

まず、中国人労働者と日本人の動的な関係を見る。前述したように、委託医の山田や、監督の鮫島、警務部員などの多くの日本人の視線からは、中国人労働者は〈動物〉化された否定的な他者であるとはいえ、決して従順で支配されやすいわけではない側面も描かれている。たとえば、張という工夫のような監督に敬意を払わない人、監督の乱打に対して肉体で抵抗する人々、銃を怖がらず強い視線で警務部員を睨む人、ユーモアのある話で不満を言う老人、銃に撃たれた同胞を見て一斉に警務部員を罵倒する多数の労働者など、強い反抗心を示す中国人が表象されている³⁵。一方の日本人は中国人を軽蔑しながらも、その反抗心を決して無視することができない。なぜならば、中国人は彼らにとって工事を進める必要な存在であり、また、〈動物〉化された体格の大きい中国人は彼らの恐怖の対象ともなるからである。そのことを、語り手は暴き出している。例えば、鮫島は張に対して「憎しみと怖れ」(286頁)という複雑な感情を持っており、警務部員は自分の体格より大きい中国人労働者を怒鳴りながらも、心の中で「も

32 アガンベンによれば、主権圏域とは殺人罪を犯さず、供犠を執行せずに人を殺害することのできる圏域のことである。

33 ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』、以文社、2003。(原著：Giorgio Agamben, Homo sacer: Il potere sovrano e la nuda vita, Torino: Einaudi, 1995.)

34 ここで使う「不安定な生」(precarious life)はジュディス・バトラー(Judith Butler)によって提出された概念である。

35 中国人の主体性についての詳しい分析は、前掲郭論を参照されたい。

う鉋屑の様にくるくる巻いてしまった何か」(289-290頁)を感じると語られている。つまり、中国人労働者は構造的に日本人以下に置かれ、軽蔑されながらも、同時に日本人に脅威を感じさせる存在ともなっている。

小説の冒頭近くで、三人の工夫が十人ほどの現場監督に乱打された際に、それを見た工夫たちが我慢しかねて最初に彼らは監督を「麻の空き袋の様に地面に打っ倒れるまでたたきのめ」(288頁)すという出来事があるが、これは盲目的な肉体による抵抗といえる。その後、ある工夫が警務部に銃で撃たれた後、「人に雇われて働く者の本能で」(291頁)一部にストライキの計画が企てられる。とはいえ、この時には、多くの苦力たちはストライキに関心を寄せておらず、リーダーの張が話している「言葉の意味もわからない」(292頁)。と言うのは、毎日酷使される苦力たちは疲労のために考える余裕もないからだ。ここには、中国人労働者内部における差異と分裂が現れている。張は「決して監督に気付かれちゃ駄目だよ」と慎重に事を進めようとしているが、集まった二十八人の中にすら「消極的で、我慢強い、生活欲の弱い」人間が含まれていた(292頁)。とはいえ、ウイルス氏病による死者が遂に発生したことで、中国人労働者はいよいよストライキを実行しようとする。しかし、工夫と苦力の間には十分な意思疎通ができず、ストライキはうまくいかなかった。その後、リーダーの「張のうしろに、一人の警務部員がいつも跟きそうことに」(296頁)なり、監視が厳しくなっただけである。ここまでの展開では、中国人がストライキを実行する際の難しさが強調されている。前述したように中国人内部には差異が存在しており、意思疎通そのものが難しい。また、監視が強化された状況の中では、彼らはストライキを実行することはもとより、打ち合わせする機会さえもなくなった。ストライキの計画が失敗した後は、「苦力の間には決定的に戦うだけの勇気も持てず」(297頁)という状況になり、ストライキを成功させることはほとんど不可能なのである。

そのなかで今一度中国人労働者たちが立ち上がる契機となったのは、洪水が襲来するという情報だった。それによって、中国人内部の分裂が解消され団結していくのである。今回は常に警務部に監視されている張ではなく、賢という「大人しい工夫」が、「洮南へ引き返し水害」から避難し、「病人を全部×³⁶鉄道株式会社病院へ入れること」という単純な要求を口頭で提出する。この要求は、「苦力の熱意な支持」をも得たものだった(298頁)。日本人の命にも関わるので、今回は日本人も「洮南へ引き返したい」という気持ちを持っている(298頁)。ただ、圧迫してくる者に対して「あくまで力で対して要求を通そう」とした中国人労働者の闘争とは異なり、彼らは「上役達の同情や理解で自分達の要求をとおそうと考えた」(298頁)。これまでと異なるのは、日本人と中国人の間における二項対立の関係が揺らぎ始めていることだ。立場は異なるが、生命を守るという類似した気持ちがある程度共有されているといえる。しかし、彼らの希望は砕けた。

「君達あ一体、この国家的な仕事を一私人の人情や情実で棒に振ろうっていうのかね。洪水が何だね。苦力が何だね。契約期間内に完成するかしないかという×³⁷鉄道株式会社の肩にかかっている重大な問題の前に、一体そんなことが、どれだけの価値を持っているというんだい！」／技師はそういう言葉を感覚する右の耳が熱くなった。電話はそのあとで、「もし洪水が出るとすれば材料や既設線の損害を少なくする用心をする様に」と命令した。(中略)彼は叱責されて勇気づいた。(p.298)

36 伏せ字。「M」か。

37 伏せ字。「M」。

ここでは、中国人労働者の要求が拒否されたのみならず、日本人職員も上司に「叱責」されている。上役はレール敷設という「国家的な仕事」の利益を絶対的に優先させなければならないと要求をはねのける。つまり、国家的利益の前にはたとえ洪水で人命が失われることがあっても大したことはないということである。換言すれば、人命を奪う自然災害を前にしても、日本人内部におけるヒエラルキーの差異は依然として解消できず、中国人はいうまでもなく、技師レベルの日本人であっても国家に捨てられる生となる可能性が浮上したということだ。この点について、郭は「日本人監督たちも苦力達も等しく帝国主義の犠牲者となっている」と論じ、両者の関係が二項対立から同一化へと変化すると捉えている³⁸。しかし、それは果たして同一化といえるものなのか。第2節で論じたように、洪水とは関係なく中国人労働者はすでに「ホモ・サケル」として最下層に貶められた存在となっていた。この時一部の日本人は「ホモ・サケル」となる可能性はあったが、洪水だけでなく疫病にも襲われている中国人とはやはり異なる優位な生存状況にある。両者の間の差異は簡単に解消されるものではなく、安易に同一化することはできないだろう。

小説の終盤で、中国人労働者たちは自分の要求が認められないと見てとり、公式的なストライキではなく、「監督に不意打を食わせて自分達だけで列車を引き返す方法」を考えはじめる(299頁)。

朝まで無気力で大人しかった支那人達の肉体の上には、何か夥しい変化がやって来た様にしか日本人には見えなかった。忽ち電話線が切られて触角のようにブラ下った。新しい××××³⁹は走って行って監督達の宿営車の前に銃をかついで立った。その中にはロープで縛られて／（二行削除）(p.299)

そして、団結した中国人労働者は、警務部員の銃を奪い、電話線を切り、監督をロープで縛りあげる。それは、これまで〈動物〉化されてきた中国人労働者が、監督たちを制圧する行為が描かれている。その行為性は、「ホモ・サケル」へと格下げされた中国人労働者が「剥き出しの生」から主体性を取り戻すことを意味しているだろう⁴⁰。構造的に「ホモ・サケル」となる中国人労働者と日本人監督の力関係が、中国人労働者たちの叛逆するプロセスにおいて逆転したのである。

この二度目の蜂起について、従来の論は彼らの成功した結果のみを重視し、ブルジョアに対するプロレタリア階級の勝利として、階級に基づく二項対立の枠の中で評価する傾向がある⁴¹。異国の労働者の抵抗が描かれたこの作品において階級の問題を無視するわけにはいかないが、前述したように、作品における日本人と中国人の関係は植民者／被植民者、ブルジョア／プロレタリアのような単純な二項対立の関係ではなく、彼らの抵抗も、単に搾取に対するものだけではない。彼らが機関車を奪取するまでのプロセスからは、ウイルス氏病と洪水によって命が脅かされる危険な状況こそが、彼らが最後に団結して抵抗する最も重要な契機となったと考えられる。そのプロセスにおいて、中国人労働者たちは使い捨て可能な生の条件に基づき、水害からの避難と病人の救護を目的とし、命を守る生命共同体⁴²を形成している。作品の最後は機関車を奪取した中国人労働者たちの勝利が示されているが、それだけではな

38 同注 16、前掲郭論、p.101。

39 伏せ字。「警務部員」か。

40 アガンベンの「ホモ・サケル」という概念は主体性の回復が見込まれるものではない。しかし、たい子の小説では、中国人の蜂起という虚構の設定を通して「ホモ・サケル」のような生から主体性を回復する方法が示されていると考える。

41 たとえば、前掲李雁南論。

42 ここでいう生命共同体とは、疫病や自然災害の前にして、生命の安全を最優先に自分たちの命を守ることを共同目標として発生した連帯関係である。

く、「病人をのせた幾つもの宿営車が次々に運動を後へ伝えて行った」(300頁)とあるように、病人を乗せた機関車であることを強調している。逆戻りする列車と病人への注目と配慮の描き方は、第2節で論じた「黒煙を吐いて威丈高に」前進する列車と焼け残った死体の描き方とは対照的である。結末において中国人労働者が団結して逆行させた列車はすでに「日本の侵略の尖兵のメタファー」から、人の命を救う列車へと書き換えられた。そこには、たい子の植民地「満洲」における最下層労働者の生への嘆きと救済の希望が託されている。

同時代のプロレタリア文学の中では、外国からの資本主義の侵略に対する中国人のストライキや蜂起などが、階級というアイデンティティに基づく団結として、搾取するものと搾取されるものという二項対立を用いて描かれることが多い。たとえば、同じ文戦派に所属している前田河広一郎は『支那』という小説の中で、中国人の闘争における真理は「世界には、搾取する者と、搾取される者との二つの階級しか存在しないという、頗る古くさい事柄であった」⁴³と描いている。また、同時期の小林多喜二の「蟹工船」においても、「プロレタリア、一番偉い」⁴⁴というように階級闘争という革命運動の理想と理論が労働者たちの頭に植え付けられ、彼らの覚悟や反抗が発生するプロセスがクローズアップされている。しかし前述したように、「敷設列車」において、労働者の団結を生み出した最も重要な原因は、階級闘争というイデオロギーではなく、疫病や洪水など命が奪われる状況⁴⁵、つまり使い捨て可能な存在となる生の条件によるものである。「消極的で、我慢強い、生活欲の弱い」(292頁)中国人労働者の大部分は、ストライキがどういう意義をもつのかもわかっていなかった。彼らは、疫病と洪水に襲われるという生の条件に触発され、生き延びるために自発的に団結するのだ。それは、張や賢という代表者が最後には後景化され、その代わりに多くの名も無き中国人労働者たちが自律的に協力して、機関車を動かし出すことを通して描かれている。ここに、従来の階級闘争という指導理論の枠におけるプロレタリア運動と組織のあり方を突き破っていくようなたい子の挑戦が見られるだろう⁴⁶。

ジュディス・バトラーは、生政治の問題を問う際に「不安定性」(precarity)という概念を提出している。「不安定性」は差別的に配分されており、侵害、暴力、そして死などの苦境に陥る人々は「適切な保護や救済がなければ、病気、貧困、飢餓、立ち退きの、そして暴力への可傷性の、高いリスクに苦しむことになる」と指摘されている⁴⁷。本論で論じたように、「敷設列車」における中国人労働者の生の有り様は、差別的に侵害、暴力、死に曝され、暴力、病気、災害への可傷性の高いリスクに苦しむ「不安定な生」^{プレカリアス}だと言えよう。したがって、この作品の中国人労働者が最終的にはリーダーなしで自然に団結し、機関車を奪取して、病人を乗せて逆行するという描き方は、労働条件の改善よりも普遍的な生の問題を重要視したものだ。そこには、疫病と自然災害に曝されながらも救護されない、多重的で可傷性の高いリスクに苦しむ中国人労働者たちの「不安定な生」^{プレカリアス}への連帯に対するたい子のまなざしが注がれている。それは、階級闘争を最優先する同時代のプロレタリア文学における概念上のインターナショナリズムとは

43 前田河広一郎『支那』、春陽堂、1932、p.214。(初出：『中央公論』、1929年3月～9月号連載。)

44 小林多喜二「蟹工船」、『小林多喜二全集 第二巻』、新日本出版社、1982、p.295(初出：『戦旗』、1929年5月～6月号連載)。

45 鼠の表象と同じように、この作品における疫病や洪水といった記号も境界侵犯的なファクターであり、生命を脅かすものであると同時に、支配と被支配の境界を越境する可能性を表す両義的な表象だといえよう。

46 この作品を発表した後、たい子は1930年6月に、労農芸術家連盟を脱退することを声明した。以降は芸術団体に加盟せず、労農派を支持し、プロレタリア文学運動主流として勢力を拡大した共産党系のナップに対抗意識を抱いており、またジャーナリズムに迎合せず、自分の文学に真面目でありたいという希望を示している。(阿部浪子「平林たい子年譜」、『平林たい子全集 12』、潮出版社、1979、pp.346-348。)

47 ジュディス・バトラー著、佐藤嘉幸、清水知子訳『アセンブリ——行為遂行性・複数性・政治』、青土社、2018、p.47。(原著：Judith Butler, Notes Toward a Performative Theory of Assembly, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2015.)

異なる、「不安定な生」^{フレカリアス}の状況を最も重要な問題とするたい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉と言えないだろうか。労働者のプロレタリアートとしてのアイデンティティより、死に曝される生の問題と生命の救護こそが連帯を生み出していく「敷設列車」の根底に、たい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉の思想を見出したい。

おわりに

本論文は「敷設列車」について、「帝国の臣民」としての日本人、動物の様に扱われた中国人という垂直的なヒエラルキーの関係で維持されている日本の植民地「満洲」の枠組の中における複層的な構図を示した上で、中国人労働者が構造的に「ホモ・サケル」としての存在となりつつも、使い捨て可能な生の条件に基づいて団結し、機関車の奪取を通して主体性を取り戻すという物語の構造と意味づけを明らかにした。

「敷設列車」は近代日本の植民地「満洲」における生政治の構造を暴き出す作品として捉えられる。とくに、作品における中国人と植民地で働く日本人の動的な関係の描き方を分析することによって、両者の関係は絶対的な二項対立でも、逆に同一化可能なものでもなく、物語の進行によって二項対立と同一化の間で揺らぐものであることが明らかになった。例えば、両者の間に越えられない民族と階級の差異が存在する一方、洪水という自然災害を前にして命を守りたいという気持ちはある程度共有されている。最下層に位置づけられた中国人労働者は厳しい労働と生存条件の中で疫病に襲われ、使い捨て可能な生としてすでに顕在的に「ホモ・サケル」として扱われていた。敷設現場で働く日本人は、彼らより上位にいなながらも、もし本当に洪水が来たならば、国家に捨てられる可能性もあり、潜在的な「ホモ・サケル」と言える。ただ、注意しておくべきなのは、民族と階級の交差性によって日本人と中国人の「ホモ・サケル」となる境目は異なることだ。中国人と敷設現場で働く日本人とのこうした複雑な関係を構築した平林たい子は、1929年の時点ですでに、誰もが構造的に「ホモ・サケル」となる可能性(程度の差はある)があるという日本の植民地「満洲」における生政治の原理を示した。

そのみならず重要なのは、「敷設列車」において、最下層に位置づけられ、差別的に侵害、暴力、死にさらされる中国人労働者たちが「不安定な生」^{フレカリアス}という生の条件に基づき連帯するという生命共同体の可能性が示され、現実的に抵抗することが難しい「ホモ・サケル」のような人々に主体性を回復する方法が提示されていることだ。そこには、異民族の最下層労働者という立場、彼らの生存を脅かす過酷な生存条件に注目し、より普遍的な生の問題を問いたい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉の思想が見られる。それは、階級闘争を絶対的な価値とした同時代のプロレタリア文学における概念上のインターナショナルなまなざしとは異なる、階級闘争のイデオロギーの枠を超越しようとするたい子の試みであろう。

楊佳嘉(ようかか) YANG Jiajia

名古屋大学人文学研究科 博士候補研究員

付記

本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号:18J13050)の助成による研究成果の一部であり、日本社会文学会2021年度春季大会での口頭発表に基づくものである。会場の内外で貴重な意見を賜った方々に感謝申し上げる。本論文における「敷設列車」の本文の引用は、『平林たい子全集1』(潮出版社、1979)による。本文を引用する際に、旧体字、旧仮名を適宜現行のものに改め、傍点、ルビを省略し、頁数のみを示した。なお、戦前の文献を引用する際の表記も同様の基準を用いた。引用内の「/」は改行を、「(中略)」は中略を意味しており、下線は筆者によるものである。また、伏せ字については、『日本プロレタリア文学集・21 婦人作家集(一)』(新日本出版社、1987)と『〈外地〉の日本語文学選2 満洲・内蒙古/樺太』(黒川創編、新宿書房、1996)を参照し、注にて補った。さらに、本論文における「満洲」と「満蒙」は歴史用語として用いるものである。

参考文献

- ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』、以文社、2003年。
(原著: Giorgio Agamben, Homo sacer: Il potere sovrano e la nuda vita, Torino: Einaudi, 1995.)
- 阿部浪子「平林たい子年譜」、『平林たい子全集 12』、潮出版社、1979年。
- 板垣直子「新興女流作家」、『女人芸術』3巻9号、1930年9月。
- 小原元『批評の情熱』、雄山閣、1948年。
- 岡野幸江『平林たい子——交錯する^{ジェンダー・クラス}性・階級・^{レイス}民族——』、菁柿堂、2016年。
- 郭璇「平林たい子の「敷設列車」における「苦力」表象——プロレタリア文学と「満洲」の労働者へのまなざし——」、『比較文化研究』第141号、2020年10月。
- 黒川創編『〈外地〉の日本語文学選2 満洲・内蒙古/樺太』、新宿書房、1996年。
- 島影盟「プロレ派の作品下 十二月創作評(3)」、『やまと新聞』朝刊、1929年12月12日。
- 助川徳是「鳥瞰された時間——平林たい子の初期四作について——」、『平林たい子研究』(宮坂栄一編)、信州白樺、1985年。
- 田中益三『長く黄色い道——満洲・女性・戦後』、せらび書房、2006年。
- 雅川滉「独断的批評六箇條(十二月創作月評)」、『三田文学』5巻1号、1930年1月。
- 壺井繁治「平林タイ子論」、『新日本文学』7巻6号、1952年6月。
- 十時三郎「文芸時評 敷設列車(1)」、『萬朝報』、1929年12月3日。
- 南満鉄道株式会社庶務部調査課『満蒙に於ける鉄道の概要』(パンフレット第六十一号)、南満鉄道株式会社、1929年6月。
- 『日本プロレタリア文学集・21 婦人作家集(一)』、新日本出版社、1987年。
- ジュディス・バトラー著、佐藤嘉幸、清水知子訳 『アセンブリ——行為遂行性・複数性・政治』、青土社、2018年。(原著: Judith Butler, Notes Toward a Performative Theory of Assembly, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2015.)
- 広津和郎「文芸時評」、『改造』12巻3号、1930年3月号。
- 前田河広一郎『支那』、春陽堂、1932年。
- 山村梁一「十二月の文戦作家」、『文芸戦線』7巻1号、1930年1月。
- 楊佳嘉「平林たい子と彼女の「満洲」体験物語——作品における空間の意味と機能をめぐって——」、『北東アジア研究』第32号、2021年3月。
- 李雁南『在文本与现实之間——近现代日本作家笔下的中国』、北京大学出版社、2013年。
- 李雁南『錯綜する人と空間——プロレタリア作家の中国像』、有信堂高文社、2021年。

